

# 奈良大学図書館蔵『伊勢物語和哥注』翻刻

松本大\*

## 要旨

本稿は、奈良大学図書館蔵『伊勢物語和哥注』を取り上げ、紹介・翻刻を通し、当該本の特徴を明らかにすることを目的とする。この『伊勢物語和哥注』とは、所謂『伊勢物語山口記』と称される『伊勢物語』の注釈書であり、奈良大学図書館蔵本はこれまで確認されてこなかった新たな写本である。

本稿前半の解題においては、書誌等の基礎的な情報を示すとともに、奈良大学図書館蔵本の性格について、先行研究において最も優れた写本とされる鉄心斎文庫蔵天文十八年識語本との比較を通して、検討を加えた。その結果、奈良大学図書館蔵本は、天文十八年識語本を相対化させる伝本として高い資料的価値を持つと結論付けた。

本稿後半には奈良大学図書館蔵本の翻刻を掲載した。

【キーワード】『伊勢物語山口記』、宗祇、『伊勢物語』、注釈書、享受資料

【keywords】"Tales of Ise, Yamaguchi account", Sogi,

"Tales of Ise", Old notation notes, Acceptance materials

## 【解題】

本稿は、奈良大学図書館蔵『伊勢物語和哥注』を取り上げ、紹介・翻刻を通し、甚だ簡略ではあるものの当該本の特徴を明らかにすることを目的とする。この『伊勢物語和哥注』とは、所謂『伊勢物語山口記』と称される『伊勢物語』の注釈書と認められる。作者は連歌師の宗祇であり、成立は宗祇の奥書により延徳年間（一四八九～九一）の初期と判明する。<sup>(1)</sup>宗祇自身によって記された唯一の『伊勢物語』注釈書であり、初心者向けに『伊勢物語』中の和歌を解説した書である。すでに山本登朗氏によって詳細な研究が施されているため、<sup>(2)</sup>その学術的価値については本稿では省略する。

『伊勢物語山口記』の伝本は、これまで、鉄心斎文庫蔵天文十八年識語本・鉄心斎文庫蔵清水泰氏旧蔵本・宮内庁書陵部蔵阿波国文庫旧蔵本・東北大学附属図書館狩野文庫蔵本の四写本と、寛文八年版本の、僅かに五本のみが確認されるにすぎなかった。本稿で取り扱う奈良大学図書館蔵本は、これらに次ぐ五本目の写本である。詳しくは後述するが、内容を鑑みると非常に貴重な伝本である可能性が認められる。な

お、稿者は、当該本の他に、石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）成算堂文庫にも一本の写本が存在することを確認している。<sup>(3)</sup>これら写本相互の関係については、別の機会に詳しく論じることとする。

奈良大学図書館蔵本の書誌は以下の通りである。

写本。一冊。縦27・0 cm、横20・1 cm。楮紙、袋綴。栗色無地表紙。全57丁、墨付56丁。一面12行。漢字平仮名交じり。外題は「伊勢物語和哥注」、内題はない。ただし、序文の後に「同物語哥注」と見える。書写年代・書写者は不明であるが、室町末期頃の写しかと思われる。奥書や識語等は見えない。和歌は一行書きであり、注記部分は和歌よりも二字下げして示されている。僅かに虫損が存する。蔵書印として、本書末尾に「月明莊」の朱方印が見られ、これにより弘文莊旧蔵と認められる。『弘文莊待賈古書目』第26号には本書と思しき典籍が掲載されており、大津有一氏も昭和九年に弘文莊にて本書を一瞥したという。<sup>(4)</sup>なお、本書を収める帙の箱書は森銃三による。

ここで、本書の性格について、鉄心斎文庫蔵天文十八年奥書本との関係を中心に、その特徴を明らかにしていきたい。鉄心斎文庫蔵天文十八年奥書本は、山本氏が

鉄心斎文庫蔵天文十八年識語本「山口記」は、さきに見たような後人の追補と思われる部分を有することからも知られるように、「山口記」の当初の姿をそのままに伝えているものでは必ずしもないが、現存伝本の中でもっともすぐれた本文を持つ一本として、版本をはじめとする他本の誤脱を補うとともに、版本のみで

は考えることなでなかつた、「山口記」の性格や成立を考察するための、さまざまな貴重な手がかりを与えてくれるのである。

と述べるように、<sup>(5)</sup>『伊勢物語山口記』の最も完備された伝本として扱われてきた。その大きな要因の一つに、鉄心斎文庫蔵天文十八年識語本が、他の伝本の欠脱部分を補う存在であることが挙げられる。山本氏も指摘するように、例えば23段や107段の注記においては、天文十八年識語本以外の三写本に共通して欠脱が存在しており、天文十八年識語本のみがその欠脱を補うことが可能であった。これらの欠脱部を奈良大学図書館蔵本で確認してみると、奈良大学図書館蔵本は天文十八年識語本と同様の本文を持つことに気付く。つまり、これまで天文十八年識語本のみでしか見られなかった本文を、奈良大学図書館蔵本は有しているのである。<sup>(6)</sup>他の写本の欠脱を補うという点では、天文十八年識語本と同等の価値を持つことになる。また漢字・仮名の使い分け等においても、本文全体を比較すると、細かな異同はあるものの天文十八年識語本と似通うことも指摘出来る。

この点に加え、奈良大学図書館蔵本は、天文十八年識語本の欠脱部分をも補う箇所も持つ。一例として、88段の注釈を以下に示す。

鉄心斎文庫蔵天文十八年奥書本

大方は月をもめてしこれそ此つもれは人の老と成もの

此大かたと云詞心得らるゝさまなから其心を云はいはれぬ物也大  
概と云程の事也こまかにいはゝ十の物は七八など世上に云事の侍  
るさやうに心得へきにや月をもめてしとおもひ成をのみめてきて

徒に老と成て後我心をおもひかへしてこれそ此と思おとろきたる  
心にあ

#### 奈良大学図書館蔵本

大かたは月をもめてしこれそ此つもれは人の老となるもの

此大かたと云詞心えらるゝ様ながら其心をいふにはいはれぬ物なり  
大かいと云ほとのことなりこまかにいは、十の物は七八など世  
上にいふことの侍るさやうに心得へきにや月をもめてしと思ひな  
りたるさま也人の身にはかならずおもふへきことのあるにくる秋  
ことの月をのみめてきていたつらに老となりて後我心を思ひ返し  
てこれそ此とおとろきたる心にや

傍線部が天文十八年識語本には見えない箇所である。この傍線部は、  
他の写本にも確認出来ることから、天文十八年識語本独自の欠脱とい  
うことになる。天文十八年識語本の欠脱すらも、奈良大学図書館蔵本  
は補うことが可能である。この他にも、天文十八年識語本は親本の段  
階で既に損傷があったと思われる箇所を有し、例えば序文には損傷部  
分がそのまま空白にて示されている。これらの損傷部分についても、  
奈良大学図書館蔵本は完備している。

さらにもう一つ注目したい点として、天文十八年識語本が持つ後人  
増補の問題が挙げられる。先にも触れたように、天文十八年識語本に  
は後人の手による増補が認められる。例えば13段の末尾に、細字で書  
き加えられた「武蔵鎧など、連歌にすましきと云心也」等がこれに当  
たる。これらの後人増補と思われる箇所を、奈良大学図書館蔵本は有

していない。この意味において、奈良大学図書館蔵本は増補以前の姿  
を留めていると判断出来るよう。

以上をまとめると、奈良大学図書館蔵本は、天文十八年識語本と近  
しいだけではなく、天文十八年識語本のような誤脱がなく、また後人  
増補がない点において、より原態に近い伝本ということになる<sup>(注7)</sup>。  
天文十八年識語本よりも優れた本文を持つとも考えられるが、稿者が  
注目したい点は、むしろ天文十八年識語本のような形態に向かつて増  
補されていく過程である。『伊勢物語山口記』がどのような性格の注  
釈書であり、どのように扱われていったのかを紐解く鍵として、天文  
十八年識語本を相対化させる重要な伝本であると位置付けたい。

ここまで、奈良大学図書館蔵本の資料的価値を述べてきた。他の写  
本間における異同や版本との関係性等、残された課題は多い。本稿の  
翻刻によって、これらの課題に対して何らかの手掛かりを提供出来れ  
ば幸甚である。

#### 注

- 1 鉄心斎文庫蔵天文十八年奥書本の本奥書に、「此一冊者延徳之初之比防州山  
口にして此物語之講尺之後初心之輩所望之間書之然者形のやうなる事共なる  
へし於余情者筆舌難及只任其心耳 宗祇」とある。
- 2 山本登朗「解題」(『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第三卷、八木書店、  
一九八九)、同「解題」(『伊勢物語古注釈大成』第三卷、和泉書院、二〇〇  
八)。
- 3 請求番号一二九八。『伊勢物語抄』として、川瀬一馬編『新収成實堂文庫

善本書目』(お茶の水図書館、一九九二)に掲載されている。また、これらの伝本の他に、平成二十八年度東京古典会古典籍展観大入札会にて「伊勢物語和歌註」(室町末期写の卷子装一卷)として出品された伝本もある。この伝本についての詳細は明らかになっておらず、今後の調査報告が俟たれるところである。

4 大津有一『伊勢物語古註釈の研究』(石川国文学会、一九五四)。

5 前掲注2の前者の論考。

6 なお、四写本に共通する脱落(写本に共通して存在する脱落)は、奈良大学図書館蔵本も脱落したままにある。

7 山本氏は、宮内庁書陵部蔵阿波国文庫旧蔵本から天文十八年識語本のよう  
に増補されていたと推定されている。この点については、新出の二写本を  
踏まえた上で、更なる詳細な検討が可能になるものと思われる。それぞれの  
写本の成立を考える上でも、奈良大学図書館蔵本の資料的価値は高い。

## 【翻刻】

### ■凡例

- ・奈良大学図書館蔵『伊勢物語和歌註』(913.32169)を翻刻した。
- ・翻刻に際して、仮名はすべて通行のひらがなに統一した。漢字については、一部新字体に改めた箇所がある。また略字等は通行の字体で示した。
- ・底本の改行については、これを反映させていない。
- ・底本の見せ消しや訂正については、可能な限りこれを反映させた。ただし、後人によるものと思われる部分は反映していない。
- ・底本に不審が残る箇所については、そのまま翻字した上で、右にルビ活字として(ママ)を付した。
- ・虫損等によって判読が不可能な箇所には□をあて、右に予想される文字を( )で示した。

此物語題号種々儀在之古注之説男女物語<sup>云々</sup>其子細は伊勢之二字おとこ女と説故也といへり此儀京極黃門奥書にのせられず然之間当流不用之所也又云業平狩の使として伊勢に下向して齋宮にあひたてまつる事此物語之為肝心之間為此名<sup>云々</sup>定家卿同おく書に破之又同奥書に此物語名字非彼筆者何称伊勢乎といへり以是当流用題号或説云伊勢書之奉宇多御門之由云り此儀不然伊勢は七条后宮の宮女なるあひた后宮に書て奉る作物語也其内なりひらの身上に実<sup>ニ</sup>にありけることもあり又萬葉集以下哥そのほかさもあらぬ事を業平をぬしになして書る所もおほく侍るへし又或自筆之本奥書此物語古人説不同或称在中将之自書或称伊勢筆作就彼此有書落事等上古人強不可尋其作者只詠詞花言葉而已と侍るにや黃門の心にも以注事なれはおほつがなくおほしけるなるへし雖然於名字者用伊勢筆作之儀於心者可詠詞花言葉之儀用之者也学者此之儀可思者歟

#### 同物語哥注

かすか野の若むらさきのすり衣しのふのみたれ限しられす

此段の詞にかりきぬのすそをきりてやるとは初て見そめたる女にこゝろさしのふかきいろ見えねは也五文字にかすか野とをくは所春日なれはなり紫は野に生る物也下句はそのとききたるかりきぬしのふすり也しのふはみたる、物なれはおもひのみたれかきりしられぬよし也

みちのくの忍ふもちすり誰ゆへに乱そめにし我ならなくに

此哥は左大臣源融公哥也只今の返しににあひたれは心をつけかへてをくれる也本哥の心は上は序也誰ゆへに乱し我にてはなき物をと云はきみゆへにこそみたれそめにしかと云心也今の女の返しに其心にては道理かなはず初て業平のをくる時君ゆへにこそみたれぬれと云へきにあらす是は我にてはあらし誰ゆへにみたれぬらむの心也源氏物語にも当座に理を付かふるあり

おきもせずねすせてよるをあかしては春の物とてなかくめくらしつ

此段の詞にその女世人にはまされりけりその人かたちよりは心なむまさりたりけるとありそれをほのかたらひし後読る哥もおきもせずねもせずとはおくるともなくぬるともなくの心なり思ひのくるしきさま也かうくるしみて夜るをあかしひる又なかめくらす儀也春の物としては春は霖雨かする物なり又春は春の哀に感じて世人みななかくむる物也大かたの人さへなかくめかちなる比たくひなき人に忍ひに逢て春の雨の霞とも雨ともわかぬはかりふりたるを見む心かきりなく侍るへしなかくむると長雨とを兼たる哥也いかにも此哥をは時節のあはれとその人のあかぬ思とをよく思入て吟味すへし

思ひあらは葎のやとにねもしなんひしき物には袖をしつゝも

此哥は二条后の御かたへひしきといふ物を業平のまいらすとてそへたる哥也葎の宿におもひをよむ事は此哥よりよめり疎屋のかなしき心なり但この哥はむくらのやとに思ひのあるにはあらす葎宿のにおもひあることならはいかてか其にねかひてねんとは云へ



き此哥の心は業平二条后を思ひそめしよりなけきはかきりなく成ゆき心にはかなはぬ恋ち也さりとて思もやまれぬかなしみのあまりにかゝる思あらは玉のうてなにも詮なしおもひなくてたにあらは敷物には袖をしてもむくらの宿にこそねめといへる心也葎の宿もかなしかるへけれども今の思ひにはまさるへきの心也

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

是は二条后また御門にもつかうまつり給はぬ比五条后の西対におはしまし、比業平忍ひにかよひ奉し事あるまじきことなればむ月の十日はかりの比ほかにかくしまいらせられしかは業平ちからなく思ひ侘つ、すくし侍し間に年かへり又む月に成て梅花さかりなる比思ひもいやまさりになれば堪わひて西のたいに行てうちなかむるに去年にゝるへきやうも侍らねはいたつらにあはらなるいたしきに思ひあかして読る哥なり心は月やあらぬとは月もたゝこそ月春も又むかしの春我身も又もとの身なから后にあひたてまつらねは月も去年の月とおほえす春も昔の春ともなく我身もとの身ともなきと云心なるを文字は卅一字にかきりある物なればもとの身にしてといひすて、心にもたせてをける所業平の哥さま也なをこの哥は梅花さかりに去年をおもひいて、といふ心をこめてうちなかめて吟しみれば余情限あるへからす俊成卿幾度も此哥の事を書をき給へりたれも心をよく付て見給へくなむ

人しれぬわかかよひちの関守はよひ／＼毎にうちもねな、ん

此哥も彼西対に二条后おはしまし、時忍ひのかよひたひかさなり

しかは人をすへてまもらせ給へる後よめり心は明也関守とは我にさはる人をいへるなるへし

しら玉かなにそと人のとひしとき露とこたへて消なまし物を

この哥はなり平二条后をぬすみたてまつりて大裏をいてし夜いとくらきに草の露をかれはなにそとおとこにとひ給ひしにその折は業平心もまとひ身をも我とも思わかさりしを御せうとたちうちへまいり給とてなく人あるを聞つけてとり返し給ひし後の哥なり何そととひ給ひし時露ともきえなましかはかゝる思あらしの儀也此哥白玉かといへる五文字よろしからすされとなにそとうけたるにより子細なく侍る也物の名を以てかとうたかひいは、あしかるへしたとへは松風か遠山かなとの類也此注は兒女子のために書をくものなれはかやうの事まで申侍るへし

いと、しく過行かたの恋しきにうらやましくも帰浪哉

大かた其まゝ聞えたる哥也業平流罪の身と成て行なうあつまにおもむく時いまた見もなれぬ海つらをゆく浪のしろうたつものにたつさまなるかうちよするかとみればやかてはかへり／＼するに我帰京はいつをたのむかきりもなき心あはれにやこのことはりをおもひ入て分別あるへき物なり

しなのなるあさまのたけにたつ煙遠近人の見やはとかめぬ

是もおなし流罪の時の事也心はあさまの山は世にかくれぬ山なれはうちみるに類なきに名におふけふりの立のほりたるさまめおとろくはかりおもしろければ遠近人も此景色を見とかめぬ事あら

しの心也旅の空にては月雪雲風もかなしきことはめつらしからず  
時にいたりては又かゝるたひにもあらずはいかてなとおもふ心を  
のふる事侍る也

から衣きつゝなれにしつましあれははる／＼きぬる旅をしそ思

この段の詞にそのさはのほとりの木のかけにおりゐてかれ飯くひ  
けりその澤にかきつはたいと面白くききけりなといへること葉あ  
りそのときかきつはたをおり句に読る哥也心は衣はきてなるゝ物  
なれはなれにしとはいへともなれにしと云より恋の心へやりて見  
るへしなれにしつましあれはとは思ふ人を都にきてはる／＼き  
ぬる思ひの切なるをあらはにいへてはる／＼きぬる旅をしそと云  
る感ふかくや旅の空の思ひも都の妻をおもふ心もすゑの句に哀ふ  
かくこもれり是中将の哥のさまなるへし

するかなるうつの山へのうつゝにも夢にも人にあはぬ也けり

此哥は都にてあひ見し人には侍るへけれと罪にあたりて都を出し  
より行ゑなうはるかに過ぎてこの宇津の山までまよひこしにこゝ  
の山路もつたかえてうち茂りてもの心ほそう只くらき夜の道をた  
とるやうの心なれは今その人の事をおもへはうつゝにも夢にもあ  
はぬ心ちし侍る儀なりまことにあはれふかくや

時しらぬ山は富士のねいつとてかかのこまたらに雪の降らん

この哥は五月のつこもりに雪いとしろうふれりといへるその心也  
時しらぬ山はふしのねにてありけると云てさていつとてかかくふ  
るらむとさ月の雪をかさねてふしむしたる心也かく云は此山をほ

むる儀也かのこまたらはむら／＼の雪なり此哥もあさまの山のこ  
とく旅行をなくさむる心也

名にしおはゝいさことゝはむ都鳥我おもふ人はありやなしやと

此段はことに哀ふかく其感たくひなき物也先武藏国としもつふさ  
の国との中にいと大なる川ありと云よりその川のほとりにむれゐ  
ておもひやれはかきりなく遠くもきにけるかなと侘あへると云る  
あはれあさからすのりてわたらむとするにみな人物わひしくて京  
に思ふ人のなきにしもあらずとかける詞しもと云字なと心を付へ  
くや京には見えぬ鳥なれは渡守にとひければこれなむ都鳥と云を  
聞てと侍る此詞なを思ひをそふる催となれるにや哥はわきてこも  
れる事侍らす古今集に此こと葉をこと書に長／＼とかける貫之の  
心おもひやらるゝものなり

みよし野ゝたのむの雁もひたふるに君か方にそよると鳴なる

此段まことに此哥などにて作れる物也哥の心みよし野は田おほく  
て雁のやとれる所也我かこゝろの人によるを面にはいはて雁にい  
はせたるものなりひたふるとは永と云字をかけとも只一向にと云  
心也たのむは田面也五音なれはたのむかたへ用によりかくいへる  
なり

わか方によると鳴なるみよしのゝたのむの雁をいつか忘ん

雁はよるなく物なれは君か方によるとも我かたによるとも云るな  
り心はあらは也只我方による心をよろこぶ儀也

忘るなよとは雲井に成ぬとも空行月のめくり逢まで

ほとは雲ゐになるとは我人あひ遠さかる儀なりさりとめくりあふまでわするなよと云心也月はめくる物なれば空行月のといひて其下へは友たちの事を云也此哥は拾遺には橘のたゝもとか哥と見えたりかやうの相違おほきものなりその集くゝの儀にしたかひて心うへきよし師説侍し者也此哥は風情おもしろき哥なりたゝ哥はいかにもすかた肝要の事とぞ

武蔵野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

まへの詞に火つけむとすと云るゆへによめる哥也若草のつまとはほのかにもえそめたるを云なり是は女の哥也若草のつまとはいへとも我つまの心也業平も我もこもれる野なればけふはなやきそといへる心也此段殊につくり事也

むさしあふみさすかにかけて憑むにはとはぬもつらし間もうるさし武蔵鐙と云事昔は天子へまいり初し物を其国の名をよひ付て云る也あふみはむさしよりまいり初しにより武蔵鐙と云ならはせり弓は信濃よりまいりそめしかはしなのゝ真弓といふかことし当時もある事也此哥はなり平都におもふ人の方へやる文にむさしあふみとかきし事ありかけて思ふよしの事也その後女の方よりをこせたる哥也さすかにとはたのまれかたけれとさすかにかけてたのむにはの心也とはぬもつらしとふもうるさしは忍ふ中のあやにくなる心也うるさしはたゝうきなと云おなしことなり

とへはいふとはねはうらむ武蔵あふみかゝるおりにや人はしぬらんと前の哥のあやにくにして一へんになければいかすへきぞと思ふ

ゆへにかゝるおりにやせむかたなくて人のしぬるといふこともあるらんといふこゝろ也如此哥おほえても詮なくや

中くゝに恋にしなすは桑子にそなるへかりける玉のをはかり

此哥は萬葉に中くゝに人とあらすは桑子にもならましものを玉のをはかりと云を少かへて作たる段也恋といふ物は先あひ見んこと本意なれとかなはねはせめてしなはやと思へはそれかなはて待るとき中くゝかく恋にしなてあらはせめて桑子にも成へかりけりと云儀也玉のをはかりはしと云詞也桑子をねかふは契のふかき物なればなり

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

まへの哥をあはれと思ひて業平ゆきてねたる夜の哥也きつとは狐也下略したる也せなは男をいふ夜ふかく鶏のなきて思ふ人をとく返すかにくきに夜も明はきつねにくはせむの心也はむるは食するの儀なり

くりはらのあねはの松の人ならば都のつとにいさといはましを

此哥はおくろさきみつのこ嶋の人ならばと云を少かへていへる也あねはの松とは女をよそへいへり松を女によそへたる時は松はその人なるを下に人ならばといへる所重語也さそはれても行へき人ならばと詞をそへて心得ぬれば可然にや

しのふ山忍ひてかよふ道もかな人の心のおくも見るへく

この哥は実に業平の哥なるへし女の心のうちはかりかたければかくよめり大かたはきこえ侍る哥也なをこの心は胸中にしのひてか



よふ道もかなと云心なり誠面白き哥なり

手を折てあひ見しことをかそふれはとをといひつゝ、よつはへにけり

此段有常は淳和仁明文徳の三代は時にあひ侍しかとも清和の御代におとろへはてゝ、たつきなきころとし比の妻堪忍のこゝろなくてあまになりていなむとする時心さしすへきたよりさへなければ業平のかたへこのよしをいひをくり侍し哥也四十年のちきりの心也此哥のうちに、かゝる契を捨て世をのかるゝ所のうらみの心こもれるなり

年たにもとをとてよつはへにけるをいくたひ君をたのみきぬらん

心は年さへ四十年のおほん契なれば其間いかばかりかたのみ給ひけむしかれば名残もさこそおはしますらめと有常の室の心をなり平有常にいへる心也是は女をたすけて読る哥也かく云やりければありつね

これや此天のは衣むへしこそ君かみけしとたてまつりけれ

夜の物までつかはすと云に女のさうそくなともそふへきなりそれをうれしくもあはれにも思てよめる哥也これや此天のは衣とは業平のをくりたるさうそく衣ともの事を天のは衣そと先ほめてことはりたる也業平のき給へるみけしなれはと云儀なりみけしとは上衣と書又御衣ともかけりといへりたてまつるとは着たる事なり車などに乗事をもいへりよろこひにたへて又よめる哥

秋やくる露やまかふと思ふまであるは涙のふるにそ有ける

秋やくる露やまかふとおもふまであるはとわか涙の袖にあまるを

いふなり其故は秋は人をうれへしむるときなれはその心にて秋やくるといへり露やまかふと思ふまでとは露は山野草木のうへにく物なるをまかへて我袖へきてしほるかとおもふまで袖のぬるゝは只今のよろこひの涙にてありけりと云心也両首なから上にてうたかひて下にて其理をことはりたる哥也

あたなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待けり

是はある女のもとへ久しくたえて後花盛に業平のきたりける時よめる哥也業平かねて此女をあたなるやうにいひけるをいま此哥に我身を桜になぞらへてよめるなり惣の心はあたなりと名にこそたてれ桜花と先いへる儀は桜はあたなるやうに名にたてとかく年にまれにとふ人をも待えて侍りされはあたに侍らぬものをといふ儀也

けふこそすはあすは雪とぞ降なまし消すはありとも花と見ましや

業平の心にはさくらのあたになきにては侍らす今日ちらぬさきにきたれはこそあれあすにもきたらは雪とふりぬへししからは木のもとなどの雪をありとはみるともものと桜とは見ましき物なれはと云は女のうつろはゑさきにきたれはこそあたにはおはせぬやうなれとよそへいへるなり

紅にほふはいつら白雪の枝もとをゝにふるかとも見ゆ

是は小町か方よりなり平にをくる哥也心は好色の人と見れはいろなき人にこそあれと業平を云心也紅をは好色にたとへ雪をは色なきによそへいへり返し哥

紅にゝほふかうへのしら菊はおける人の袖かともみゆ

此哥は小町か我をけさうしてよめるとはなりひら心得ぬれとた、大かたの哥のやうによめることをまへの詞にしらす読に読るとはいへり此心は紅にほふかうへとはかさなりたる心にはあらず世上に其うへになど云儀也紅にほひたる所もあり又もよりのしら菊なれは匂ふかうへとはよめる也

あま雲のよそにも人の成行かさすかにめには見ゆる物から

天の雲はよそなからみゆる物なれは我中の常に見かはせとも業平のたちよらぬによそへいへるなり

天雲のよそにのみしてふることは我ある山の風はやみ也

あま雲のやうによそにのみしてへぬることはおはします山のかせかはけしければなりと云は女の別人に心をかはすをしりて云心也此女はありつねかむすめのよし古今に見ゆ

君かためたをれる枝は春なからかくこそ秋の紅葉しにけれ

此哥は業平やまとに侍る女のもとより京へのほるに女の心はたのまれぬ物なれはうつろひやすらむとおほつかなさにかえての若葉のもみちたるをおりて付てつかはしけるなり君かためにおる枝のうつろふは御心さもやあると云儀なり

いつのまにうつろふ色のつきぬらん君か里には春なかるらし

女の返しの心はたゝいま別て行人のいつのまにうつろひ給へるにかといふ儀也春なかるらしとは秋に成はてぬるにこそあれとらむる心なり

いてゝいなは心かろしといひやせん世のありさまを人はしらねは

是はなりひらとたかひに思かはして住わたりける女の心まことにあたる物にていさゝかのことをうらみてたちいてける時読をきたる哥也心は我かく立いつるを世間の人は心かろしとそいはむ夫婦の中をうらみをはしらてと云儀也世のありさまとはおとこ女の中の事なるへし

おもふかひなき世なりけり年月をあたに契て我やすまゐし

是は女の立いてたる跡に業平のよめるなり思かひなき世なりけりとは切に我思し人のあさはかに立出たるをおもふ心也とし月をあたにちきりて我やすまゐしとは業平わかうらみを思返してわれにはとかもなしとおもへと年月をへしうちになをさりに契てや過らむと一かたに女にあやまちをおふせぬ所業平の心也人はいさ思やすらむ玉かつらおも影にのみいと、見えつゝ、

此哥は萬葉に人はいさ思ひやむともたまかつらかけに見えつゝ、わすれなくにと云哥を少とりかへたる物なりさて心は人は思やすらむ思はすやあるらんしらす我はおも影にのみいと、見えぬるよし也思ひやすらむのうちに思はすやあるらむと云心ある也又やみんかた野のみのゝと云哥も又や見さらんと云心侍也今はとてわするゝ草の種をたに人の心にまかせすもかな

業平の心にいまは何せむなと思て忘やせむの心にて忘草のたねをみ心にまかせすもかなとよめり

わすれ草うふとたに聞物ならは思けりとはしりもしなまし  
返しの心はそなたに忘草をうふるときかは我を思としらむの儀也

女の心ははかなくて心みしかきを業平はのとかによめる所面白く  
や

忘るらんとおもふ心のうたかひにありしよりけに物そかなしき

是は彼女に又いひかはして侍ける後女の心猶あたにて我をやわす  
るらんと思ふうたかはしさにこしかたよりなをまさりてかなしき  
と云儀也

中空に立ゐる雲の跡もなく身のはかなくも成にける哉

此哥は前の返しにはあたれりとも見えす此心は彼女我身のあたに  
して業平の所をたちいてしくやしきにさらは思ひもとちめすし  
てわするゝ草のたねをたになと業平をしたふ事いとゝあたるは  
かなしきを又忘やすらんとなり平の哥侍るをみて我さまのはかな  
さを中空の雲の跡もなきさまにたとへて身をなけきたる哥なり  
うきながら人をはえしも忘ねはかつうらみつゝ猶ぞ恋しき

うきながらとは業平の心はうけれどとわすれたければかううらみ  
てもなを恋しきの心なりかつはかくと云心也昔はかくと云心にて  
かつといへるおほし古今にもあまた侍るなり此哥を業平見てされ  
はよと云てと侍るは我もその心にてこそあれと云儀也さるほとに  
返しは行末をことゝをのみにへるなり

逢見ては心ひとつを川嶋の水のなかれて絶しとぞ思

此哥は上句はあらは也水のなかれてたえしとは水は絶せぬ物なれ  
はそれになすらへてなからへて行すゑたえしと云儀也ある儀に水  
のなかれてとは川嶋の水はわかれて又あふ物なれば其ことく又あ

はんの心そといへり当流の儀は心ひとつをかはしまのと云て嶋を  
上にて用にたてゝ侍るほとに又下にてたつる事をは嫌なり

秋の夜の千よを一よになすらへて八千代しねはやく時のあらん

秋のよはななき物なるをその千よを一夜にしてそれを八千夜しふ  
たりねてや満足する事のあらむといへる心也返し

秋の夜の千よを一夜になせりともこと葉残て鳥や鳴なん

心は明也いかにもやさしき哥也

つゝゐつのゐつゝにかけしまろかたけ過にけらしもいも見ざるまに

つゝゐつのゐつゝとはつゝゐつのゐつゝといへはなをたらさるあひ  
たつもしをそへてつゝゐつのゐつゝと読り只かさね詞也惣の心は  
業平と此女といときなき比たけなどをあけたにかほとならはな  
と契けるなるへしおとなに成てかくよめり此哥の一二句を古注に  
煩しくいへり不用事也定家卿哥つゝゐつのゐつゝのつらゝとけぬ  
まにはやくもうつる冬のかけかなとありかさね詞なるへし女の返  
し

くらへこしふり分かみもかた過ぬ君ならすして誰あくへき

ふり分髪とは童女のかみ也かた過ぬはとしをへて漸かみあける  
ほとになる心也女のさかりたちなとする時髪あけててひんをそき  
かさりをするやうの事あり君ならすしてとは必おとこのするわさ  
にはあらねとなりひらならては我にたれか手をもふれんの心也

風ふけはおきつしら浪立田山夜はにや君かひとりこゆらん

おきつしら波とは盗人此山に立所なるにより云付たると顯注密勘

に頸昭か云て但今案たつた山といはむとて沖津しら浪といひおき  
つしら浪といはんとて風吹はといふにてこそあらめと云て萬葉に  
伊勢の山のへの御井にてよめる哥にわたつ海の沖津しら浪たつた  
山いつかこえなんいもかあたりみむといふをひけり定家卿此今案  
可興可仰やまとにてあらぬから衣のたくひ也といへり此哥はこ  
もへすしてあふよしもかなといはんため上に云たる物也さて此女  
さしもうらむへきことはりを思けちてなりひらをたやすくいたし  
やり我身をやさしくさうそきて琴かきならし夜半にや君かひとり  
こゆらんといへるあはれたくひなくや哥のことから又無類也清輔  
奥儀抄云此哥貫之は哥の本といへりいかはかりの事にか侍らん  
君かあたり見つゝをゝらん伊駒山雲なくしそ雨はふるとも

是は万葉の哥也たかやすの女業平のおはしける大和のかたを見て  
此哥を思よせて詠したるなるへし

きみこむといひし夜ことに過ぬれはたのまぬ物の恋つゝそぬる

是はおなし女のかたへなりひら契てたひ／＼過し比古き哥を又詠  
せりといへり心は誠にあはれ也

あら玉の年の三とせを待ひてたゝ今夜こそ新枕すれ

これは業平朝臣<sup>家</sup>の宮つかへをする人なれば女のもとへ三とせゆか  
さりし比又男の心かけたるにあはむと思けるおりしもなりひらき  
たりて門をたゝかせし時読ていたせる哥也かくいひいたしたりけ  
れはなりひら

あつさ弓ま弓つき弓年をへて我せしかことうるはしみせよ

梓弓ま弓楓弓は重詞也としをへてとはみとせと云其間の事也弓は  
ひくと云心なり惣儀はきみに心引てよりこのかた年をへてと云心  
也下句我せしかことゝはなんちかせしちかひをうるはしくせよな  
りかことはちかひ也うるはしくせよは真実にして変すなと云心也  
梓弓ひけとひかねと昔より心は君によりにし物を

女の返しの心はきみか心は我にひきもひかすも我心はむかしより  
君による儀也弓は引は本末よる物なればかくいへり

あひ思はてかれぬる人をとゝめかね我身はいまそ消はてぬめる  
女なり平をしたひ行とかなはて岩にをよひのちしてかきし哥也心  
は明也

秋の野に篠分しあさの袖よりもあはてぬる夜そひちまさりける

是は業平小町かもとへかよふ事しけゝれとあはすしてかへしのみ  
しければ読る哥なり秋の野のさゝ分あしたの袖は露けきものなれ  
と小町かあはてのみかへす夜の袖はひちまさりぬるの心なり

みるめなき我身をうらとしらねはやかれなてあまの足たゆくくる

此哥は小町か返し也心はみるめなきとは我業平に見えぬ事也それ  
は業平にうらみあればあはぬを我身をうらめしとはしらてやあし  
もたゆきはかりおはしますらんと云儀也

おもほえず袖にみなとのさはくかな唐船のよりしはかりに

おもほえずは思かけす也もろこし船のよりしはかりはのし文字は  
過去にあらずやすめ字也當時はかやうには読侍らず惣はたゝ涙の  
おほき儀なり

我はかり物思ふ人は又もあらしとおもへは水の下にも有けり

是は業平ゆへ物おもふ女たらいの水に我影のうつるを見てよめり

心はあらはなり

水口の我や見ゆらん蛙さへ水の下にてもろ声になく

この女によめる哥を聞てなりひらの読る也かはつは水口に一なけ  
は惣の田のかはつか鳴物也その思ひはみなくちの蛙の心より也其  
ことく我や水口に見ゆらんとは其方の思ひの本人の我そといふ心  
なり

なとてかくあふこかたみに成ぬらん水もらさしと結ひし物を

是は色このむ女の業平の所を出て後の哥也あふこかたみは逢期か  
かたきを歎心也しかもかたみはかこをよせてよめり水もらさしと  
むすふとは籠は竹にてくむをむすふとはいへりふたり水もらさし  
とむすひし契りをいかてかとうらむる儀也俗にかたみに水を汲な  
と云様の事あり

花にあかぬなけきはいつもせしかともけふの今夜にける時はなし

是は春宮の女御の染殿の後の四十賀をせさせ給ひし事也花の賀と  
は花の時分なれば云也雪の時分するを雪の賀と云かことし哥の心  
は花にあかぬなけきは春ことなれと今日の花の賀の時一しほ花を  
思心切なる儀也下の心は恋也人を花になすらへ云なり

あふ事は玉のをはかりおもほえてつらき心のなく見ゆらん

玉のをはかりとはしはしと云心也哥はあらは也

つみもなき人をうけへは忘草をのかうへにそおふといふなる

まへの詞業平をある女のよしや草葉よならんさか見んといひける  
を聞てよめりうけへとはのろい事也とかなきものをかくいは、そ  
なたの身にこそおはめといふ心也

いにしへのしつのをた巻くり返し昔を今になすよしもかな

むかしといにしへと一首にあるは其用によりてくるしからす但當  
時はあしかるへし哥の心はむかしの契をしたふ心なり

葦へよりみちくる塩のいやましに君に心のおもひます哉

是は津国蘆屋のほとりにありける女業平の京へのほる時なりひら  
の思ふ色のなきをうらみけるときよめりうへには見えねと思心の  
下にふかきをあしへにみつ塩にたとへたる也

こもり江におふる心をいかてかは舟さすさほのさしてしるへき

女の心は下にはおもふ心ふかくともそれをさしていか、しるへ  
きと云也思ふ色をあらはにしらまほしき心也こもり江とはふるき  
江などの事也

いへはえにいはねはむねにさはかれて心ひとつにな歎ころかな

つれなき女になりひらつかはしける哥也心はいへはえいはれすい  
はねは又胸の中さはかれてくるしき儀なり

玉のを、あはをによりて結へれば絶ての後もあはんとぞ思ふ

此玉のをはしはしの事にもあらず又いのちの事にもあらずた、を  
といはむため也あはをとはあはせたる緒也結へればとは契の事也  
あはせたるをはたえはてぬ物なれば我ちきりもさやうにあらまほ  
しき也



谷せはみ峯まではへる玉かつらたえんと人に我思はなくに

上は序也かつらは絶ぬ物なれは人にたえんと思はぬ心をなすらへ

いへる也此哥は万葉の哥を少かへて作れる段也

我ならて下ひもとくなあさかほの夕かけまたぬ花にはありとも

色このみする女の心もとなきにつかはしける也心は明也哥さまえ

もいはすやさしき哥なるへし返し

ふたりして結ひし紐をひとりしてあひみるまではとかしとそおもふ

我心ひとつにて契を変すましきの心也

君により思ならひぬ世中の人はこれをや恋といふらん

業平有常を待わひてよめる哥也心は明也

ならはねは世の人ことに何をかも恋とはいふと問し我しも

ありつねか哥の心は我も恋といふ事はならはねは世上の人ことに

何を恋と云そと問来りつる我しも業平を切に思ふ故恋をしるよし

也

いて、いなは限なるへみともしけち年へぬるかとなく声をきけ

崇子内親王かくれさせ給ひし時葬送を見んとてなりひら女車にの

りて出し時源のいたる女車と見てよりきて螢を車にいれてのれる

人を見むとするときその螢を業平のけつとてよめる哥也いて、い

なは限なるへみとは此内親王さう所へ出給は、この世のかきりな

るへしそれを世人なけきていふ事はとしへ給へる人かはとてなく

こゑをきけと也わかくてうせ給ふことをみな人なく声の事也き

けとはいたるかにあはぬけさう心をいさむる心也ともしけちとは

螢の火をけす事なれとも命の事也

いと哀なくそ聞ゆるともしけち消る物とも我はしらすな

いたるの返しの心なくこゑをきけといふをうけていとあはれにな

くそきこゆるといへるなりきゆる物とも我はしらすなとは一切衆

生は法界の五大かむすほ、れて人となれる物也分散すれとも法界

五大の火なれはつるに消る事はなしと云也

いて、いなはたれか別のかたからむありしにまさるけふはかなしも

此段はある人むすめをもちたるを業平かよふ所にておもひかけた

るおり我むすめの心にも業平に心をやかさはさむと思ひてほかへを

ひやりし時の哥也いて、いなはとは女のいてたる儀也誰かわかれ

のかたからむとは我も又此世にあるへきならねはと云心なりされ

はありしにけふの思ひはまさる儀也

紫の色こきときはめはるに野なる草木そわかれさりける

是は業平のいへにをき給へる女のいもうといやしき男もちたるか

其男のうへのきぬをはるとてはりやりし事を聞てろうさうのうへ

のきぬをつかはす時の哥也紫の色こきときは我ちきれる女の寵

愛のときは其ゆかりみなわかれすあはれなる心也野なる草木とは

ゆかりの事をよめる也紫の一もとゆへにむさしの、といふおなし

心也

いて、こし跡たにいまかはらしをたか通路と今はなるらん

あたる女をなりひら心もとおもふ儀也誰をかかよはすらむ

のこゝろ也

郭公なくなきとのあまたあれは猶うとまれぬおもふ物から

是は賀陽親王の方につかひ給へる人に業平忍ひにいひかよひける  
を此かやのみこ此女に心かはし給ふをきゝて業平のよめる也な  
なくは汝がなくさとのあまたあれはなをうとましきぞ思ひはすれ  
ともと云心也時鳥に女をなすらへよめるなり

名のみ立してのたをさは今朝そ鳴庵あまたとうとまれぬれは

してのたをさは郭公別名也心は名のみたてゝ庵あまたとうとみ給  
ふかつらさにけさそなくと云儀也今朝はいまといふ儀なり

庵おほきしてのたをさは猶たのむ我すむ里にこゑし絶すは

我すむさとにたにたえすをとつれはかよふ方ありともたのむへき  
の心也

いてゝ行君かためにとぬきつれは我さへもなく成ぬへきかな

是は有常女業平の室にて侍りし比有常ゐなかへくたりける時女の  
さうそくいたすとてこの哥をなりひら読て裳のこしに付てつかは  
し侍る哥也必我もをぬくにて侍らねと我さへもなくと云につきて  
ぬくとはよめりもなくはわさはいなきの心也人はいはへは我もあ  
しからぬよしの儀也もは喪の字也裳なくと云に此心萬葉五巻に見  
えたり

ゆく蜩雲のうへまでいぬへくは秋風ふくと雁に告こせ

この段はなりひらにある人の恋てうせし後其いみに業平こもり侍  
し比みな月のつこもりのおりふしさ夜ふけて早涼いたりて暑氣の  
心露はかりものこらすうち吹風もたゝ中秋の天の心ちするに蜩の

たかくあかるをなかくて雁もはやゝかてきたるへき心ちして身に  
しむはかりの空をなかくてよめる哥也景氣誠に心にうかふ哥也  
暮かたき夏の日くらしなむれはそのことゝなく物そかなしき

此哥は前の哥とおなし時はよまぬ哥と見ゆそのことゝなくとは春  
秋などは物のあはれも心にうかふを夏の空はさしてあはれと思ふ  
へき景色もなければとも我ゆへうせし人の哀をおもふゆへこの比の  
空も物かなしき儀也又かの女は一たひのみるめもなくまして心の  
うちもしらす過にし中なれと我ゆへうせし人なればこもりぬれ  
はとありしともかゝりしとも思ひいつる事なきゆへにその事とな  
く物そかなしきとよめるにや

めかるともおもほえなくに忘らるゝ時しなればおも影にたつ

此哥ありつね人の国へくたりし後忘やし給ひけん世中の人の心は  
めかるればわすれぬへき物にこそなと云のほせしとき業平の読て  
をくりし也わすらるゝ時なくおもかけにたてはめかるともおほえ  
ぬよしの心也

大ぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとえこそたのまざりけれ

なりひらを思ふ心はあれとあたなりとおもひて女のよめる哥也大  
ぬさとは柿に麻のをゝ付たる物なりみそきなとする時は人ことに  
大ぬさをとりて身をはらひなとして取わたす物なりひとりの手に  
とまらぬ物なれば業平の心のたのまれぬをよそへていへるなり  
大ぬさと名にこそたてなかれても終によるせはありといふ物を  
引手あまたの名にはたとゝ大ぬさは御祓の後なかせは一かたによ

る所ある也我も君かかたをつゐのよるせそといへる心なり  
いまそしるくるしき物と人またむ里をはかれすとふへかりけり

紀利貞かあはのすけになりてくたりし時はなむけせむとて業平の  
待給へるにをそく来ける時読る也人まつことのくるしさを思ひ知  
りて人まつと云里をはかれす問へかりけりと云る也

うらわかみねよけにみゆる若草を人の結はんことをしと思ふ

ねよけに見ゆるとは根とぬるとをかねたりいもうとのうつくしき  
をみて人のちきりとなるへきをおしく思ふこゝろなり

はつ草のなとめつらしきことはそうらなく物をおもひける哉

初草はわか草と云返しなれば也めつらしきことの葉そとはあにの  
身にてかゝることの葉のあるを思かけぬ事なればなとめつらしき  
ととかめいふ也下句我はあにの事なればかゝる人ともしらてうら  
なく憑み思つるの儀也

鳥の子を十つゝとをはかさぬとも思はぬ人をおもふ物かは

前の詞にうらむる人をうらみてといへり百のかいこをかさねん事  
はあるましき事なりかさぬることありとも思はぬ人をおもふへき  
物かはと云心也これよりつきの哥みなあるましきことをとりいて、  
其はありともと云哥なればしるすにをよはす

あさ露はきえのこりてもありぬへし誰か此世を憑はつへき

吹風に去年の桜はちらすともあなたののみかた人の心は

ゆく水に数かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

行水と過るよはひとちる花といつれまで、ふことを聞らん

此すゑの哥は前に去年の桜行水などいふ哥を取合よめりゆく水も  
過るよはひもちる花もみなしはしまと云事をきかぬ物なり其こ  
とく思はぬをおもへといへはとて聞へきにあらすといへり此五首  
はおとこ女たかひにうらみあひてよめる哥也

うへしうへは秋なき時やさかさらむ花こそちらめねさへかれめや

人の庭に菊うへける時なり平のよめる哥也うへしうへはとはかさ  
ね詞なりかくうふるとうふるならばもし秋のなき時やさかさらん  
の儀也秋と云秋はさくへきの心也おもしろくよめる哥なり

あやめかり君は沼にそまとひぬる我は野に出てかるそわひしき

人のかさりちまきをこせたる時の哥也あやめにてちまきをはまか  
ぬ物なれと当日の物なれば哥によみよき物にて詠する也君はあや  
めを心さし我はかりをしてきしをつかはすの心也

いかてかは鳥の鳴らん人しれすおもふ心はまた夜ふかきに

あひかたき女にあへる夜の哥也おもふ心の夜ふかきとはのこりお  
ほくてわかるゝ心也

行やらぬ夢路をたとる袂にはあまつ空なる露やをくらん

つれなかりける女にいひやりけるとあり心は夢中にかよふみちの  
心のまゝならてたとる袂には天よりくたる露やはをく思の露こそ  
をけと夢のうちまでくるしきことをかこつ心也

思はすはありもすらめとことの葉のおりふしことに憑まるゝ哉

女をえうましう成はて、後よめる哥也思はすこそなりはてつらめ  
ともこしかたのわすれかたくておりふしことに忍ふ心也

我袖は草の庵にあらねともくるれは露のやとり也けり

前の詞にふして思ひおきておもひく／＼あまりてと待るに此哥は大やうにてたかふやう也但切に思ふ人ゆへに涙は十二時中かはくへきことはりなし是はその上の時にあたる夕暮のさまなり

恋侘ぬあまのかるもにやとてふ我から身をもくたきつる哉

恋わひぬと云は恋のいかにともせぬ思ひのきはまりたるを云也さるほとに我から身をもくたきつるかなとうちなけく儀也

あれにけり哀いく世の宿なれや住けん人のをとつれもせぬ

是は業平の家のなか岡にて桓武天王の内親王おなし所にあまたおはしますその宮女ともなりひらの所へ行たるに業平内へかくれぬれはよめる哥もあるしのなき家の心をよみたてたる哥也詞つかひおもしろき哥也

葎生て荒たる宿のうれたきはかりにもおにのすたく也けり

女の哥にあれたるやとのさまをよめは業平も我やとなれはむくら生てなと読りかりにもおにのすたくとはかゝる宿はたゝかりそもおにのあつまるよりほかにとふ人もなしと読り女をさしておにと云事つねの儀也うれたきは愁也

うち侘ておちほひろふときかませは我も田つらにゆかまし物を

此女ともほひろはんなど所の秋のおりふしなれはいひあへるを聞て我も田つらにゆかまし物をと時のあひしらひおもしろくや

すみわひぬ今は限と山さとに身をかくすへき宿もとめてん

前の詞にひんかし山にすまんといへる隠遁の心也

我うへに露そをくなる天の川とわたる舟のかいのしつくか

おなし段に物いたくやみて死入たりければとあり絶入したるにおもてに水をそゝきていき出たれは大かたの露にはあらし天川わたるかいのしつくなどにてやあるらんといいふ心なり古今にかりの涙や落らんなど云同事也

さ月まつ花たちはなのかをかけは昔の人の袖のかそする

橘はさ月をまちてさく物なれはさ月まつといへりむかし見し人なれはさかなゝる橘によそへていへるなり

そめ川をわたらむ人のいかてかは色になるてふことのなからむ

女のすたれのうちにして業平を色このむ人そといひし時よめり心はあらはなり

名にしおはゝあたにそあるへきたはれ嶋浪のぬれ衣きるといふ也

女なりひらを色このみのすき物と云をきゝて色になるてふことなとかなからんといへれは其を落しているこのみと云名におはゝさにはあらしたはれ嶋にうちかへる浪よそより見れはしらきぬのやうなれとまことはさはなくてたゝ浪のぬれ衣なれはといへる心也いにしへの匂ひはいつら桜花こけるからとも成にけるかな

是はなりひらのわか身のむかしにかはりたるを述懐の哥也古注に小町を業平のいへるとかける見くるしき事也

これや此我にあふみをのかれつゝ年月ふれとまさりかほなみ

是はなりひらの所をうかれてし女にあひて我身のおとろへたるさまを前の哥に読給へるを女ははつかしと思て返しもせさりし時

よめる也心は我にそふ事をのかれて出し人の思ひます事もやと思へは年月をへても思まさらてつれなきよといふ心也是又古注の儀はつたなくや

も、とせに一年たらぬつくも髪我をこふらし面影にみゆ

此段世心つきて漸老ゆく女色にふけりたるかあらぬ夢かたりしける其子あはれみて業平にかたりければなさけふかき心にて行てあひし後此女業平のかたへゆきてかいま見せし時よめるなりこの女百とせにひとせたらぬほととの女にはあらねと業平のすさまじく心につかぬゆへに百とせにひとせたらぬほととの思かしたる心也我をこふらしとは其女我をこふるか面影にたつ□<sup>(は?)</sup>の儀也此哥はた、され哥なり

さむしろに衣かたしき今夜もや恋しき人にあはてのみねん

彼女のよめる也心は明なり上は古今の哥也これもつくり事なるへし

吹風に我身をなさは玉すたれひまもとめつ、いるへき物を

おもひかけたる人のあり所をさへしらねは思ひわひてよめる也心は明也

とりとめぬ風にはありとも玉簾たかゆるさはかひまもとむへき

とりとめぬかせのやうにおはしますともゆるしてこそとをさへたる哥也

おもふには忍ふることそまけにける逢にしかへはさもあらはあれ

業平切に思ひかけしを二条后かくなせそなと侍し時よめる哥也心

は明なり

恋せしとみたらし川にせし御祓神はうけすも成にける哉

なりひらの心にもあるましきこと、思ひわひて思ひをやめ給へとはらひなとせしにいと、思のせん方なきによめる哥也古今にはあはさる恋のうちにいるなり

あまのかるもにすむ虫の我からとねをこそなめ世をはうらみし

業平の忍ひの思ひあらはれてなかしつかはすへきよしの事いて、二条后をは染殿の后の方にをきまいらせていさめ給へる時読給へる哥也上は序也我からとねをこそなめとよみ給へる事此道の肝心也我からと思へは人にうらみと云事はなき物也人をうらむる事なければ和の道よくいたる也返々此我からと云事此世後世のため又能智才学の道にもいたるへきの理也

さりともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらすして

業平の人の国よりと云は除名せられて後流罪の国さたまる物也その定ありてしかもまた都にあれと国さたまる心にて人の国よりきたるとかけり是はなりひら笛をふき鄙曲などとしてもしやきてもあひ給ふ事もやと思ひてうかれたるさまを聞て読給へる哥也

いたつらに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつ、

是も同こ、ろのたのみにて行かへりする心を業平のよめる也此哥人丸の哥といへり可尋之

難波津を今朝こそみつの浦ことにこれや此世をうみわたる船

此段はなりひらの津の国にする所あるに都より行平をはしめてし



る人おほくたり侍しをとまひてなにはわたりに行てせうよう<sup>えん</sup>  
せられる時の哥也なきさに舟とものあるをみてとあり上の句は  
所の眺望也今朝こそといふはあらたに見たるさま也これや此世を  
うみわたるとはあま人の世にふるさまをあはれむうちに人の世を  
わたるを思ひつゝけたる心なり是を哀かりてとは業平の哥にかん  
したる心なり

昨日けふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとなりけり

是もまへの時の事を又一段に書たると見ゆきのふ今日と云に心あ  
り惣の心は二月はかりの余寒に此山かきくもりみな人の見るめに  
さはりつるか晴行をみれば梢ともの雪さらに花のはやしのやうに  
見えたるをなかめて時こそあれ昨日今日この山を雲のかくしつる  
は花の林を人の興せん事をうしと雲かおもひけるよと云心也うし  
と思ふとは雲かねたむ心也狂雲妬佳月と云の類也

雁なきて菊の花さく秋はあれと春の海へにす住吉のはま

此うらの眺望のおりふしの春のけしきたくひなきをいはんとて雁

鳴て菊の花さく秋はあれといへり菊には世間の儀也

君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

是はなりひら狩の使として伊勢おはりへくたりし時齋宮にあひ給  
ひし朝の事也心ははかなきあふ夜のさま思わかぬ心まとひの儀也  
きみかきてあひけるか我行てあひけるかと云此二句の心をすゑは  
みないひのへたる物なりつゝ心に思ひわかぬ理也

かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはこよひさためよ

上句は齋宮の哥とひとつ心まとひのさまなり下句は夢ともうつゝ  
とも今夜あふて定よと云心也世人さためよとそはに付たれとも此  
物語にては今夜といはてはおもしろからす侍也  
かち人のわたれとぬれぬえにしあれは

たゝ一夜にてあかぬ心をあさきえんと云心にてわたれとぬれぬえ  
にしとはいへり縁と江とをかねたるなり

又あふ坂の関はこえなむ

つい松とは続松也すみはきえ炭也盃のさらにかける下句也又あふ  
坂のとはなりひら帰京にこゆへき山也其をあふ事によそへて齋宮  
をなくさめたてまつる心也

みるめかる方やいつこそ棹さして我にをしへよあまのつり舟

是は業平おはりの国へ行とて大よとのわたりにていつきの宮のわ  
らはに云かけたる哥也みるめかるかたやいつくとは齋宮のわらは  
なれば宮の御事を思ひて我にをしへよといふ也わらはを釣舟によ  
そへいへる也

千はやふる神のいかきも越ぬへし大宮人のみまほしさに

此哥は齋宮の女房のほのすきたるか業平に云やる哥也大宮人にた  
にあはゝ神のいかきもこえむの心也大宮人とはなりひらを云也  
恋しくはきても見よかし千はやふる神のいさむる道ならなくに

神のいさむるみちならぬとはいさなきいさなみの夫婦のかたらひ  
し給ひしより八百万の神もいさめぬ事と云心也

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波哉

心は大淀の松のもとへ浪のよりきては立かへりくするか松をうらむるやうなれば松は浪のためにはつらくもなき物をなにゆへうらむるそといふ儀也かく云心はなりひらの齋宮をうらみたてまつる事をかくなすらへよめる也松をは齋宮の我身によそへ浪をは業平によそへたる物也

めには見て手にはとられぬ月の内のかつらのことき君にそ有ける

そこにはありときけとせうそこをもえいはぬ女に業平のつかはす哥也心はあらはなり此哥は萬葉の哥を少とりかへたる也

岩ねふみかさなる山はへたてねとあはぬ日おほく恋わたる哉

此哥はやかてあらはに聞え侍り但それはあまりにや此心はあひおもふ中は山川を隔てもかよふならひなるをわか中は岩ねふみかさなる山をもへたてねとあひみる事なきをかなしむ心也

大淀の浜に生てふみるからに心はなきぬかたらはねとも

是はなりひら伊勢の国にいきてあらんといひける時齋宮の哥なり上は序也只見るからになくさむ物そかたらはねと、云心也業平の余にしたひまいらせ給へるをいひのかれんとて読る也なきぬとはなくさむ心也なりひらのすき心をいさむる儀也見るからにとひとたひまみえ給ひし心也

袖ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるを逢にてやまんとやする

上三句までは序也見るをあふにてとはほのかに見しをかきりにてやまむとや我はいかてさてやみなんとなをしたふこゝろなり

岩まよりおふるみるめしつれなくは塩干しほみちかひもありなん

みるめしつれなくとはみるはいつもみとりにて不変なるをつれなくといへり其ことく心中ふへんならば世はしほのみちひのやうにかはることはりありとも心ひとつはしつかにしてよかるへきの儀也かひもありなんとは海辺の哥なれはいへとも心はたゝしかるへからむの儀也是も業平をいさめたる哥なり

涙にそぬれつゝしほる世の人のつらき心は袖のしつくか

しほのみちひにはぬれぬ物を人のつらき心ゆへこそ袖のしつくもあれといへる心也

大原やをしほの山もけふこそは神代の事も思ひいつらめ

是は二条后春宮のみやす所と申ける時をしほの明神は春日にて氏神にましますまいり給へる時なりひらの哥也今日こそは神世のこともおもひ出らめとは明神の御心をさうていへり其故は日神代に日神と天兒屋根の御神は君臣合体の契ましますツマヤり今更ツマヤとう宮は日神の御すゑなり宮す所は藤氏にておはしますは神代のちきりかはらぬを神もうれしくおほすらの儀也下の心神世の事とはたゝ昔と云同事なりほのかなりし昔の契を二条后も思ひ出給ふらんの儀也

山のみなうつりてけふに逢ことは春のわかれを問となるへし

此段は文徳天皇女御多賀幾子といへるは西三条右大臣良相の女也其女御うせ給て安祥寺にてみわさ侍りし時さゝけ物のおほく侍しか山などのことく侍しを此女御の兄右大将常行おはしましてけふのみわさを題にて春の心はへある哥たてまつらせたまふ時なりひ

ら読る哥也さ、け物のおほきを真の山のうつりきて今日の別のあ  
とをとふとよめりさ、け物は捧物也法事にはかならずたてまつる  
事也

あかねとも岩にそかふる色見えぬ心をみせんよしのなければ

是は山しなの禪師の宮のかたへ常行のおはせし時也嶋このみ給ふ  
君なれはとて千里のはまより父右大臣へまいらせける石を都より  
取よせて禪師のみこへ奉り給し時岩にかきつけたる業平の哥也心  
は色見えぬ心をはしらせむよしのなければこの石をたてまつるも  
あかねともせめて我心を岩にかへて見せたてまつるよし也あかね  
ともは此石をたてまつりても不足なると云心也此段も前の段の類  
也

我門に千尋あるかけを植つれば夏冬たれかくれさるへき

是は行平女の腹に清和天皇の御子貞数親王むまれ給し時業平の哥  
也我か一門中に天子御子生れ給ふ事を我門に千ひろあるかけをう  
ふるとはいふ也千尋の竹は仙家の竹なれは寿命をいはふ心なり惣  
て竹は王道にたよりある物也先上下の節をたかへぬ事第一王者の  
道也又直にして空虚なる所又王道の肝要の御こ、ろ也夏冬たれか  
とは此みかけにかくれて寒暑のくるしみを一切衆生わするへきの  
心也

ぬれつゝ、そしめて折つる年の内に春はいくかもあらしと思へは

この哥は弥生のつこもりに人に藤をおりてやる時の哥也ぬれつゝ、  
そしめておりつるとは花をも春のかきりをも賞する心也春はいく

かもとは晦日の哥にはいか、なれと哥人の心はきふくはいはて哥  
の姿を本とする故なり年のうちとは一年中の心也雨をも藤をもい  
はさる所昔の哥のならひなり

塩かまにいつかきにけん朝なきに釣する舟はこ、によらなん

前の詞にこの殿ほむる哥といふによく叶へり此おと、は徳いかめ  
しくいきほひある人にてよろつおもしろきことをこのみ給へる中  
にみちのくのしほかまをうつして毎日しほをやかせられし事第一  
の事なれは此所を則まことのしほかまにしていつかきにけんとい  
へり爰をしほかまの浦にするほどに釣する舟もこ、によれとよめ  
るなりきとくの心也

世中に絶て桜のなかりせは春の心はのとけからまし

惟喬のみこかた野の狩をし給ふ時なききの院のさくらをかさしに  
て上中しもの人哥よみける時業平のよめる也たえて桜のなかりせ  
は春の心はのとけからむとはさくを待より散はて、跡をしたふま  
て春のうちは花に心のとかならねは桜なくはのとけからむといへ  
り花に心のふかくとんしたる儀也

ちれはこそいと、桜はめてたけれうき世に何か久しかるへき

なりひらの余に花に着したる心を有常きらひてかくよめりめてた  
けれとは愛したけれと云心也あかね心はちるによりての心なり下  
句まことにことほりふかくはつかしき哥也

かりくらし七夕つめにやとからむあまの河原に我はきにけり

これたかのみこかた野をかりてあまの川のほとりにいたるを題に

て哥よみてさかつきはさせとの給へはよめる也心は明也

一とせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしと思

年に一たひきます君とは彦星也それをまつ間はやとかす人あらしといへる也是はありつねか返し也

あかなくにまたき月のかくるゝか山のはわけていれすもあらなん

かくよめるは水無瀬の宮にて三月十一日のことなり御子ゑひてう

ちへ入給ひなむとせしおりの心也哥は無儀

をしなへて嶺もたいらに成なゝん山のはなくは月もいらしを

有常みこにかはりて読り哥は明也

枕とて草引むすふこともせし秋の夜とたに憑まれなくに

是はこれたか都にかへり給ひてその宮にてのことなりなを御子人ゝをしたひ給ひし時業平のよめる也三月つこもりの夜なれば秋の夜などのやうに夜なかき比にも侍らねは枕をも結はしと云心也春の別をしたふ心のふかき故也其夜のさまを此哥にて思ふへき物なり

忘ては夢かと思おもひきや雪ふみ分て君をみるとは

惟喬親王貞観十四年七月出家し給し翌年業平正月に小野へまいり給し時ひえの山のふもとにて雪いとふかゝりしをしのきてまいり給ていにしへの事なときこえし時読る哥也此御子は文徳第一のみこにて位にもつけ給ふへきをあまさへ世をのかれ山ふかきみむろにつれゝとこもりおはしますを見たてまつり給はん業平の心に忘れては夢かとおもふとのへ出す心たゝいまもその世のあはれ

うかふ哥にこそ

老ぬれはさらぬ別のありといへはいよゝ見まくほしき君哉

業平の母伊登内親王よりとみの事とて云をくる哥也君とはなりひらをいへり心は明也

世中にさらぬ別のなくもかな千世もといのる人のこのため

我身ひとつにいはいはて世間人の上にかけていへる尤おもしろく云は

我母君の心なり

おもへとも身をしわけねはめかれせぬ雪の積ぞわか心なる

此五文字色ゝの事を云て後にいふこゝろ也業平の心には月日をかさねてもみこの御かたにあらまほしく思へともと云心也朝家奉公の身なれば身をわくるならひなくておもひつゝかへらむとするを此雪かきくらしふりければ都へかへりかてにするたよりとなれはこの雪のつもるか我心なると云儀也めかれせすははれまもなくふる雪の心なり

今までに忘れぬ人は世にもあらしをのかさまゝ年のへぬれは

世にふれは此ことはりあるよしの儀也かくいふは我はひとり人を忘れぬ心なり

蘆の屋のなたの塩やきいとまなみつけのをくしもさゝすきにけり

いやしきものは髪なとけつることもせぬ儀也さゝすきにけりとはかみに昔はくしをさすこと侍るあひたかくいへり

我世をはへふかあすかとまつかひの涙の瀧といつれたかけん

此哥は行平の布引の瀧を見て見てよめりわか世をはけふかあすか

とは命の事にあらず行平我身の時にあはすしていたつらに明くらすほとに我世は、や今日かあすかにきはまりたる身とおもふあひたの涙と此瀧とはいつれたか、らむと云心也

ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくも散か袖のせはきに

瀧のしら玉のたまのを、ときてみたすやうなるを見て此水上に玉のを、ぬきてみたす人そあるらんといへる也めつらしき心也下句袖のせはきとは卑下の心也まなくもちる哉と云は袖にあまるはかりなるを過分に思心にいへり

はる、夜の星か川辺の蜩かも我すむ方のあまのたく火か

是は布引のかへるさに蘆屋の浦に焼いさり火のことの外に数もなくおほきかおもしろきを見てはる、夜のほしか又川へのほたるか又あまのたく火かと云へり三ながらうたかふ心は大かたのいさり火とも見えねは也眺望の儀なり

わたつ海のかさしにさすといはふも、君かためにはおしまさりけり

海松を海神のかさしにとり成ていへるおもしろくや祝とは海神のおしみあひする物ながら都人のためにはおしまてよすると云心也大かたは月をもめてしこれそ此つもれは人の老となるもの

此大かたと云詞心えらる、様ながら其心をいふにはいはれぬ物なり大かといふことなりこまかにいは、十の物は七八など世上にいふことの侍るさやうに心得へきにや月をもめてしと思ひなりたるさま也人の身にはかならずおもふへきことのあるにくる秋ことの月をのみめてきていたつらに老となりて後我心を思ひ返し

てこれそ此とおとろきたる心にや

人しれすわれ恋しなはあちきなくいつれの神になき名おほせん

われ恋しなは我ゆへとは思はていかやうの神のとかめにて死たるなとか神になき名をおふせていはれんと云心也余に人のうらめしきま、にをして人の心を察する儀也

さくら花けふこそかくも匂ふらめあなたのみかたあすの夜のこと

女のあす物こしにてあはむと云に桜につけてやるなり心はあらは也

おしめとも春の限のけふの日の夕暮にさへ成にける哉

ことはりあらはなりこまやかなる哥の体にや

あしへこくたな、しを舟いくそたひ行かへるらむしる人をなみ

此女の所へゆけときたるよしをたにしられぬ心をあしへこく舟のそれをしられぬにたとへいへる也

あふな／＼思ひはすへしなそへなくたかきいやしきくるしかりけり

この五文字心得かたき也今案源氏物語におふな／＼と云詞あり念比なる儀也又はまことになと云心也此五もしあいうえをの五音にて可心得まことに思ひはすへし也なそへなくは定家卿の儀なそらへなく也心はたかきもいやしきも恋の思ひはた、ひとつなる心也

秋の夜は春日わする、物なれや霞には霧やちへまざるらん

此段は業平のもとかたらひし人別人に嫁したるに子ある中なりければ今もいひかはしけるに此哥を読んでくりし也当時秋なれば秋をは今の男にたとへなりひら我身をは過にし方なれば春にたとへ



て我より今の男をは千重も思ひまさるらんといへる也

千々の秋ひとつ。春にむかはめや紅葉も花もともにこそちれ

心は今のおとこ千人も業平ひとりにはをとるへしの心也紅葉も花もともにこそちれとはおとこの心はいつれもたのまれぬへきことはりならぬのよしをいへり尤おもしろく心を安する儀なり

彦星に恋はまさりぬ天川へたつる関を今はやめてよ

是は業平物こしに女にあひてよめる也心はひこほしは誠に一とせに一夜あふならひにてかなしけれども其もあふ夜になればさはる事なきを我はいろ／＼思ひをつくしてたまたまあふことの物へたてたる程に彦ほしにもまさりたる恋と云也此哥にめて、逢にけりとそ

秋かけていひしなからもあらなくに木葉ふり敷えにこそ有けれ

是は業平のいかてとおもふ女秋風吹たちなん時あはむといへりけるかさはりありける比女の読てなりひらにつかはしける也秋と契しかさもなき也木のはふりしくえとはあさきえといはん用なり江と縁とをもたせていへる也

さくらはなちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まかふかに

この段はほり川のおと、四十賀に業平読る哥也散てかきくもれ老のくる道まかひやすると云心也賀の哥にすゑにかにとをける所しせんに出合て面白哥とそ

我たのむ君かためにとおる花は時しもわかぬ物にそありける

梅の作枝にきしを付て忠仁公へ業平のたてまつれる哥也雉を立入

たる也時しもわかぬは作えたの心なり但つねの花なりとも祝によせていは、さあるへきことなり也

見すもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくけふやなかめくらさん車の下すたれより女をほのかにみてよめる哥也一二句はほのかに見たる心也恋しくはとは只今みるよりた、ならぬ人いと、こひしさそは、あちきなくなめやくらさむの心也

知しらぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるへなりければ見すもあらずの返し也しるしらぬとはいなともせともあちきくなにかいはむあひあはすは思ひこそしるへにならめといへる心也忘草おふる野へとは見るらめとこは忍ふなり後も憑まん

是はこうらうてんのはさまを業平とをる時あるつほねより忘草をしのふ草とやいふとて出させ給へはよめる哥也此心はなりひらこなたをわする、やと心みたまふ儀也わすれたるを忍草とやいはむとて出させ給へは其こ、ろをなりひらしりてかくよめりもとよりしのふ草とも忘草一草をいへはかくよめる也

さく花の下にかく、る人をおほみありしにまさる藤の陰かも

此段は行平の所にて左中弁まさちかを請してさけのみ哥よみける時業平の読る也かめにさしたる藤のしなひ三尺六寸ありけるかためしなきと忠仁公の先祖にもこえてさかりなると取合てなすらへよめる也

そむくとて雲にはのらぬ物なれと世のうき事そよそに成てふ

世をそむけはとて雲風などにのる事はなけれどもそむくとすれば

世のうきはよそになると云心也斎宮の世をのかれ給へるをうらやみて業平のよめる也

ねぬる夜の夢をはかなみまところめはいやはかなにも成まざる哉

ねぬる夜の夢とはほのかに人にあへる事也そのまゝにてはかなければまことの夢にも見ゆるやとちまところめはねもいられす夢もみえねは我心のいよゝはかなさの増る心也

世を海のアマとし人をみるからにめくはせよとも憑まる、哉

めくはせするとは目にて心をはす儀也斎宮の尼になり給へるを海辺のあまになすらへてよめるなり

白露はけなはけな、ん消すとて玉にぬくへき人もあらしを

業平のある女のつれなきにかくてはしぬへしといひやりたりけるにより玉にぬくへき人もあらしとはとり用ゐる人もあらしと云也かく云はなりひらを庶きせぬ心也

千はやふる神世もきかす立田川から紅に水くゝるとは

此心は立田川に神な月はかりみむろの山のあらしはけしき比紅葉ことゝく散しきてこの川うつもればたたる時水はたゝ紅をくゝるやうに見ゆるをいはんかたなきにより神代にこそ神通自在のきとくはあると聞をもれも只今のやうなる興はきかすと云心なりつれゝのなかめにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし

此哥はなりひらのいもうとを敏行のおもひそめしころよめりつれゝとひとりうちなかめられたれはいと涙川も水まされば袖のみぬれてあふことのなきなきなり

あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへなかるるときかは憑まん

心はあらは也身さへなかるといへるゆうなる哥也

かすゝに思ひおもはす間かたみ身をしる雨はふりそまされる

敏行女をえて後やる文に雨のふるを見わつらひ侍るなど女のかたへいひやりける此女は業平のいもうとなりそれにかはりてなりひらよめり数ゝとは思ひおもはすといはんとて云出たる詞也思ひも思はずもあればやとひかたくなれり真実おもはゝ雨にさはるへき事にもあらず見わつらふといふに身をしる雨ふりまさと云心也身をしる雨とは雨によりて身をしるこゝろなり

風ふけはとはに浪こす岩なれや我衣てのかはく時なき

女の業平をうらみてよめる哥也心はあらは也つねのこと草とは何となく口すさみのやうによめる心也

よひことに蛙のあまたなく田には水こそまされ雨はふらねと

なりひらの返しなりかはつのあまた鳴田とは田をは女のかたのことによそへてあまたの人に御心かはすゆへにこそ御袖の水はまされと云也水まさるとは涙なり雨はふらねとゝは業平の我かたの思ひならねとゝ云心也きゝおひける男とはかく時なきと女の云を我事と業平のおもひえたる也此哥おもしろからす例の作事なるへし

花よりも人こそあたに成にけれいつれをさきにこひんとか見し

友たちの人をうしなへるかもとへやるといへりたしかに心得かたし古今には人の花をうへをけるか其花さかぬに身をまかりにけれ

は紀茂朝<sup>(きもち)</sup>かよめると見えたりそれは心も明に又あはれもふかしこ、  
にても大かた其ことくに見侍らんか

思ひあまり出にし玉のあるならむ夜ふかく見えは玉むすひせよ

是は業平を女の夢に見たるよしひる時に読てをくりける哥也夢  
は玉しゐの所作なれば我君をおもふたましゐそ見えつらん玉むす  
ひをせよといへる也かくいふは我魂をそなたにむすひとめてをけ  
としたふ心なり玉結ひとはうかれたる玉など見たる時ましなひす  
ること也

古はありもやしけん今そしるまた見ぬ人をこふるものとは

哥は業平のよめる也心はあらは也返し

下紐のしるしとするもとけなくにかたることは恋すそ有へき

人にこひらるゝにはひものとする事あるにさもなければそなたの  
いふことくは恋ぬにこそあれと云心也又なりひらの返し

恋しとはさらにもいはし下紐のとけんを人は其としらん

大かたの心はあらはなりされと前に人をこふるよしひやりたる  
に其しるしとするひもゝとけねさはあらしと返しにあるほとに  
我思ふ心切なれはかならず紐はとけんとおもふほとにともかくも  
詞に出てはいはしひもとけは我おもふとしれといふこゝろなり

すまのあまの塩やく煙風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり

女のことさまになりける時業平のよめる也心は明なりされと人の  
心変する所をとともかくもいはてしほやく煙風をいたみ思はぬかた  
にと云所まことに心詞幽玄至極の哥なるへし

なかゝらぬ命のほとに忘るゝはいかにみしかき心なるらん

業平ひとりゐてうらむる女の事をよめる也此哥三十一字のうちに  
長短の二字をよみいれてはあしかるへきを心詞幽にあきらかなる  
こと尤おもしろき哥なり

翁さひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつも鳴なる

芹川行幸之時行平大鷹のたかゝいにてかりきぬに露をすりてきた  
るか花やかなるさまなり其時六十九のとしなれば大鷹のたかか  
にまいる事我身に似合す侍れとけふはかりは君の行幸の目出度  
よりかく花やかにもしやうそきたるを人なとかめそといへる也  
おきなさひとは老てわかひたるさまの事なり

おきのゐて身をやくよりもかなしきは都嶋への別なりけり

なりひらみちのくにより都へのほりける時女のよめるといへり  
おきのゐ宮嶋といふ所にてとあり古今には小町か歌哥と見ゆ  
浪まより見ゆるこ嶋の涙ひさしく成ぬ君に逢みて

萬葉にははまひさきとありすこしとりかへたるはかりなり上は序  
の哥也心明也

我見てもひさしく成ぬ住吉の岸の姫松いく代へぬらん

われ見てもは業平の心なり

むつましと君はしら浪みつかきの久き世より祝そめてき

むつましと君はしらなみとは業平に神の勅あることなりしるへき  
物をといふ心也下句はあらはなり前の詞に御神けきやうし給てと  
はあらはれ給ひて也現形し給也

玉かつらはふ木あまたに成ぬれば絶ぬ心のうれしけもなし

たまかつらは草のかつらなり葛はたよりにしたかひていつれの木  
にもかゝる物なるを業平の心によそへてたえぬもうれしからす  
なりたのみかたき心を云也

かた見こそ今はあたなれこれなくは忘るゝ時あらましものを

心は明なりたゝしあたをあたとにこりてよむことしかるへきなり  
あふみなるつくまの祭とくせなむつれなき人のなへの数みん

此段は女のまたよへすとはいまた男にもあはしと思ふを業平の思  
かけたれはあへるおとこあるよしを聞てかくよめりさてはおとこ  
ひとりのみにもあらしといふ儀也つくまの祭には女おとこにあひ  
たる数なへをかつきて渡ると云事ある由いへり此女いてゝなへを  
かつくことはあらしなれとも世のたとへにいへるなりうらむる  
こゝろなり

うくひすの花をぬふてふ笠もかなぬるめる人にきせてかへさん

梅つほよりいつる人の雨にぬれてゆけは梅の花かさを思ひよせて  
業平かくよめり返し

鶯の花をぬふてふ笠はいなおもひをつけよほしてかへさむ

梅の花笠はいやなり思ひをつけよとは心さしをつけよさあらは其  
心さしをほうせんと云心也ほしてかへさんとはぬるゝといふ返し  
なれは詞のえんなり心はほうせむの儀也

山しろの井手の玉水てに結び憑みしかひもなき世也けり

女の業平に契て変したるにつかはす哥也井手の玉水をとり出すは

むかし井てにて女を契て帯をつかはしてつゐにをとつれもなかり  
し時女思ひわひて玉水に身をなけしことあり変したるによりかく  
いへる也

年をへて住こし里を出ていなはいと、深草野とや成なん

ふか草にある女をかれかたになりてかくよめるなり心はあらは也  
野とならば鶉となりて鳴をらんかりにたにやは君かこさらん

かりにたにやはとはかりそめのたよりにもちもやよらむの心也  
このかりは狩はによそへていへるはよろしからす

おもふこといはてそたゝにやみぬへき我とひとしき人しなけれは

此哥を古注などは色々理を付て云也当流にはしか侍らす前の詞に  
もいかなる事を思ひけるおりにかといひ哥にもいはてそたゝにと  
侍れはとかくいゝはゝあたるましき心也いはねは万法にはつれすと  
や云へからん

つゐに行道とはかねて聞しかと昨日けふとは思はさりしを

古注に昨日まではけふとは思はさりしと云て心あまりて詞たらぬ  
哥といへり当流にはうちまかせてたゝきのふ今日とはおもはさり  
しをといへり誠あはれもふかくや侍らむは世上の人ことの心なる  
へしたゝそのまゝの儀返くしかるへくこそ侍らめ